総論

古川松根と小車社

三ツ松　誠

はじめに

鍋島直正の改革によって佐賀藩は、西洋近代科学の導入を推進し、有為な人材を生み出し、維新の一翼を担うこととなった。古川松根は、この直正に幼少期より仕えて最期は殉死した側近中の側近として、その名を知られている。だが彼はまた、藩内有数の文化人でもあって、和歌サークル小車社の中心人物でもあった[1]。各地で歌集が出版され撰者が業界での影響力を競い合うという状況の中で、松根がどう歌人として活動していたのか紹介することで、彼を中心に一つの盛り上がりを見せた幕末佐賀歌壇の在り方についての見取り図としたい。

一、多芸多能の直正側近、古川松根

ここではまず、先学の評価を引きつつ、彼についての基本的な事実を紹介する。

＊古川松根とは

佐賀藩士古川松根（一八一三～一八七一）は幼名英次、通称与一、号を楢園などといい、志波左転太芳名、羽室平之丞貞風とともに、幕末維新期の佐賀藩を率いた鍋島直正（一八一五～一八七一）の側近として長く仕えた。最後は直正に殉死し、その「純忠」を称えられた。面識のあった久米邦武の言葉を引用しよう。

当時公の御相手たりしもの数人あり。古川与兵衛儔綱の三男英次（後に与一松根と号す）は、前年邸内に生まれて公より長ずる一歳なるが、御相手に出づべく内命せらる。志波左伝太芳名（よしな）は、公と同年の誕生にて、御性に選まれて附き添へり。羽室平之丞長暠（てる）も亦御相手となれり。（中略）古川は非常の多能多芸なる人にて、瀟洒の気性は水の如く、些の凝滞あるなし。幼児より温順和平にして、他より叱責を受くべき挙動はなかりしが、さるにても磯浜より灸をすゑられて苦

[1] 主な先行研究としては内柴二男童『寧楽園歌伝純忠古川松根』（私家版、一九二六）、佐賀県立博物館編『古川松根―人と作品―』（財団法人鍋島報效会、一九八八）が在る。当該期の佐賀藩の和歌史についてはこのほか、今泉蟹守を取り上げた中原勇夫編『今泉蟹守歌文集』（私家版、一九七一）や志津田兼三『蟹守さん　歌文集に見るその生涯』（佐賀新聞社、二〇〇一）、相賀照忠を取り上げた池田賢士郎『武雄の歌人　相賀照忠』（アピアランス工房、二〇〇六）などが挙げられる。

しかりし事多かりしよし、自ら話せりとなん。[二]

辞世の句は次の通り[三]。「今はとていそぐや終のたび衣たちおくるべき我身ならねば」、「君ひとりのこしまつりてふるさとへ帰るこころのあらばこそあらめ」。

佐賀藩校弘道館で尊王論を教えた枝吉神陽（一八二二～一八六二）とは、交遊を持ちつつも、中央政治に対する態度には違いがあったようだ[四]。直正は幕末京都の政情探索を松根に担わせ、神陽の弟子である尊王攘夷派の政治的暴走は抑えられた。

＊古川松根略年譜[五]

文化一〇年一〇月：江戸桜田の佐賀藩邸で生まれる
文化一一年一二月：鍋島直正生まれる
文化一二年：内々に直正の「御相手」となる
文政五年三月：直正の「御相手並」を命じられる
天保元年二月：元服、直正の佐賀入りに同行する
天保元年六月：十人扶持を給せられ、御側奥小姓となる
天保五年一一月：山狩りの際の勢子奉行立会役に（七～一一年は非役、弘化二年まで）
天保七年一一～一二月：腰物役小道具役、鬢役を兼帯
天保一二年：取調子掛合を命じられる
天保一二年一一月：衣紋方を命じられ、高倉家に入門
天保一三年八月：衣装納戸兼帯
天保一五年頃：「小車」に社中の歌会活動が確認できるようになる
弘化元年九月：直正に従い、長崎でオランダ船に乗り込む
弘化二年一一月：道具方道具取調子掛合を命じられる
弘化三年三月：神野茶屋造営につき家作方掛合を命じられる
弘化三年五月：隠密用書整を命じられる
嘉永七年三月：中島広足と交流したことが広足『佐嘉日記』に描かれる
安政五年四月：直正に従い、観光丸で薩摩に赴く
安政六年六月：『楢廼落葉』を刊行
安政七年二月：直正が大老井伊直弼を藩邸に招くのに際して、松根が部屋を飾る
文久元年一二月：直正隠居
文久二年六月～七月：攘夷派が盛んに活動する京都に赴き「上京日記」を残す
文久二年一一月～三年二月：再度上京
慶応元年：この頃「嵯峨のしをり」成立
慶応三年：『小車集』を刊行
慶応四年正月～三月：鍋島直大と上京し、新政府の意向を受けて直正を上京させる

二 久米邦武『鍋島直正公伝』一（中野礼四郎、一九二〇）二五三～二五七頁。
三 前掲内柴、二七三頁。原文の句読点はこれを省いた。
四 義祭同盟に入った久米邦武に対して古川松根は、勤王論者として危険な振る舞いをしないように戒めている。久米桂一郎『久米博士九十年回顧録』上（早稲田大学出版部、一九三四）六一〇頁。
五 公用を中心に項目を採った。年譜中に掲げた著作のほか、前掲内柴、古川松根「古川系図」前掲佐賀県立博物館編所収、に拠る。

慶応四年四月：直正の長女慈貞院を帰国させる
慶応四年七月：直正と帰国
明治元年一一月：直正の娘宏子の細川家への嫁入りに同行
明治二年二月：直正の東京行に同行
明治四年正月：一八日、直正死去、二一日、松根殉死

＊書画・衣文・造作

松根は市川米庵に学んだ書、柴田是真に学んだ画、高倉家に学んだ衣文道など、諸芸に通じていた。

公の御相手たりし古川松根も亦米庵を師とし、非凡の能筆なり、その筆蹟を観て公の書風の変化を聯想せらる。松根の文芸に於る非凡の才能は、尽く公の為さゞる所をなして其長所を恣にしたり。学問にありては漢学にさまで心を用ゐずして国学殊に国文学に最も其才能を発揮し、詩賦を試みずして専ら和歌を詠じ、斯道に於ては天下に聞えたる名人なり。書は楷法に長じ、兼て仮名に達し、画は文人画を試みずして大和画風に心を入れ、最も著色に長ぜり。其他の文芸も一として能くせざるなく、而も亦凡てに堪能なり。其風致趣味は尽く公と趣向を異にしたりと雖も、亦天稟の然らしむる所、而してよく才性を発達せしめて其美を研出し、是に由つて常に公の左右に侍し、能く公の為し能はざる所に於て補闕拾遺の任を全うしたりしかば、公も亦実に非常の便利を得られ、真にその手足の用をなすものとして眷顧深かりき。[六]

直正が藩政改革によって倹約・財政健全化を図り、機動的な側近の登用・活用を行う中で、松根は重要な位置を占めた。直正の近しい側近として、身の回りの世話から様々な文事まで、一人で担った。一日でも近くにいないと、直正が不自由を感じる程の存在であったという。

御小姓古川与一が腰物方、小道具方を兼ねて職務の行き届きたるを褒し、特に金を賜はりて更に衣装納戸を兼ねしむ。是年[七]より公衣服の裁縫は御通女中の職務となし、諸侍の家庭同様、奥の居間には側の女が針箱裁縫道具を取り拡げて衣服を縫ひ、古川は其衣服の調度等総てを一人にて弁じたるなど、以前に各専修者が集まりて醸したる弊害を一掃し尽しゝを以て、事は極めて簡易になり、公の側には書生の集合あるも差閊なき程の活溌なる輩侍したりき。[八]

神野御茶屋の造営を担当し、直正が幕府から天草諸島を預かるための内諾を大老井伊直弼[九]から取り付けるにあたって、直弼を江戸藩邸に招いた際の会場セットアップも松根が担当した[一〇]。あるいは西洋式軍事技術の導入に関する研究記録をも残

六 前掲久米邦武、二、七九～八〇頁。
七 天保一一年カ。
八 前掲久米邦武、三、九八頁。
九 井伊直弼は漢学を好まず、国学者長野義言を側近として重用した。そして茶道にも造詣が深いことで有名である。和文脈の文雅を好む人物であった。義言も松根同様、藩主側近に在って社中を導いた地域の宗匠だった。拙稿「『当世百歌仙』の刊行とその周辺」『近世文藝』一一一（二〇二〇）など。
一〇 前掲内柴、七三頁、木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』（九州大学出版会、一九九七）。

している[一一]。松根のデザイナー能力は、軍事改革の中でも活用されたのである。

一、銃陣笠之義、士分・御徒以下両様革製ニして古川与一ニ雛形製作被仰付、御備立被差出候事。[一二]

また、直正の言行等を書き記した「古川松根筆記」やオランダ船への乗り込み記録の絵など、直正側近にして文・画に優れた彼がかき遺したもののおかげで、佐賀藩幕末政治史研究者は助かっている。

二、和歌結社小車社と古川松根

次に、佐賀藩における和歌の歴史を概観したうえで、松根らが運営した和歌結社小車社について見ていくことにする。

＊小車社以前の佐賀藩の和歌

飛鳥井家を歌道師範とした小城藩二代藩主鍋島直能（一六二三～一六八九）や、二条派歌学を学んで古今伝受を得た本藩二代藩主鍋島光茂（一六三二～一七〇〇）など、文雅を好んだ藩主の下、京都の公家との婚姻関係を前提に、一七世紀後半の佐賀では堂上和歌の流行が見られた。あるいは鹿島藩四代藩主鍋島直條（一六五五～一七〇五）の事跡も有名だろう。

一八世紀の佐賀歌壇は相対的に低調な時期であったが、八代治茂（一七四五～一八〇五）の頃から再び流行を見せ、一九世紀はじめには堤範房（一七五〇～一八二〇）、重松道雄（一七五四～一八〇三）、山領利昌（一七五六～一八二三）、岡本髄巌（一七七五～一八五一）、今泉千春（一七七五～一八三六）といった人物を中心に歌会が持たれるようになった。何れも二条派の人物を師としていた[一三]。

今泉千春や山領利昌は、桂園派を生み出した香川景樹（一七八六～一八四三）とも関係があったようだ[一四]。

＊「小車」

松根の関わった桂園派系の和歌結社である小車社の初期の活動を示す「小車」[一五]の序を次に掲げる（弘化二年南里有隣序「小車」）。

いま哥よむといふ人かれこれあれど、大かたは椎が下のかげにあそべるこそさはなりけれ、この小車の円居につどへるは、これをおきて桂の園よりいで、つたのほらになれたるともがらばかりにて、ひだゝくみが手にとまる真かなのかなはゞからず、振分髪のくらべし筒井づゝきらはぬ、ねぢけ人のみになんありける、もとよりちかき世のこちたき

一一 金丸智洋「古川松根科学技術及び兵学関連史料」『ゆけむり史学』四（二〇一〇）。

一二 安政四年七月二三日頃、本島藤太夫「松乃落葉」三、杉本勲・酒井泰治・向井晃編『幕末軍事技術の軌跡』（思文閣出版、一九八七）、二一四頁。

一三 堤範房「雨中の伽」『随筆百花苑』一五（中央公論社、一九八一）、『佐賀の文学』（佐賀新聞社、一九八七）九二～一〇九頁。

一四 前掲内柴、二五～三三頁。

一五 佐賀県立図書館に在る鍋島家文庫（公益財団法人鍋島報效会所蔵）に収められている（鍋 080-2）。

教にはなづまず、今々しきおきてにはかゝづらはねども、さすがに横おしのよこにはゆかぬ小車なれば、いにしへのまさしき本意には、これやかへりてかなふべからんか、よしやまさしき本意にはかなふともかなはずとも、思ひをのべ心をやるまでのなぐさみなれば、よめやよめやゑせうた、めぐれやめぐれ小車

弘化二年正月七日　南里有隣識

内柴二男童による松根に関する古典的な研究は、この序文を二条派批判と桂園派の立場表明（近世堂上和歌のルールになっていた、かな留まり、つつ留まり[一六]の否定）と読んでいる[一七]。

そこで指摘されていない点について考えてみたい。ここに挙がる「椎が下」は、岡本髄巌の号の一つである。鍋島家文庫にも「椎本」が加筆したという歌集が残る（鍋 082/補 021）。彼は石清水八幡宮の神職出身で、八代藩主治茂に取り立てられて城番や側役、国学教諭、什物役、江戸詰目付や京坂聞役を務め、藩政に参画したという。歌人としては二条派の芝山持豊の弟子にあたる[一八]。してみれば件の記述は、小車社が、岡本髄巌門下の二条派サークルとは別に、桂園派サークルとして出発したことを示すものなのかもしれない。

また、自由に読むことで却って古意に叶うのでは、という主張は、古意を学ぶものとして和歌を意義付けた国学系歌論（有隣と国学については後述）と桂園派の立場とを折衷したものにも見える。このような、流派の枠に必ずしもこだわらない（広義の）地下歌壇の地方的展開に、時代の一特質を見て取ることも不可能ではあるまい。

この「小車」は、天保一五年一二月二日から弘化四年正月一二日まで、一一回の歌会記録を載せる。最初のメンバーは南里有隣、志波芳名、副島重遠、古川松根の四人。その後羽室貞香（風）、山崎景臣、薮内宗也、今泉尚之、原田清音、横山季好、重松春香、今泉満春、南里元籌、西牟田玄才の参加が見える。

＊南里有隣（一八一二～一八六四）

「小車」の序を著した南里有隣は、「小車社の時代に於て、松根よりもやや先輩であり、主唱者であった同人」[一九]である。通称は伝作。父、十蔵元籌ともども藩校弘道館において和学の師を務めた。江戸では塙塾（和学講談所）に、また京都では六人部是香に学んだ国学者であり、歌集・文集や地域史に関する記録を編纂した「肥前旧事」など、数々の著作を残している。

有隣はまた、日本思想史研究者の間で名の知られた人物でもある。というのも、彼はキリスト教神学を換骨奪胎することで創り出された救済論的な復古神道神学の提唱者として、平田篤胤と並んで、かの村岡典嗣によって高く評価されたからだ[二〇]。

一六 大谷俊太『和歌史の「近世」　道理と余情』（二〇〇七、ぺりかん社）に詳しい。

一七 前掲内柴、三四～三五頁。

一八 前掲「雨中の伽」、中島吉郎著・太田保一郎訳『佐賀先哲叢話』（一九四一、甲斐ヨネクリ）。

一九 前掲内柴、三九頁。

二〇 日本思想史学の創始者とも目される村岡典嗣以来の彼に関する研究史については、拙稿「南里有隣研究の回顧と展望」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』九（二〇一五）を参照のこと。

彼の影響は、明治にまで及んでいる。好学の藩主鍋島直正のもと、藩校弘道館への家中の就学を義務化した佐賀では、神職もまた学問を身に付けるよう要求されることになった。弘道館における有隣の『古事記』講義を前提として、嘉永七年、神職向けの学校「本教学の館」あるいは「神学寮」を創設するに至ったのである。こうして神職向けの学問・教育が制度化された結果として、六人部是香の影響を受け、明治新政府に入って平田系の復古神道家として活躍する国学者が、佐賀から輩出されることになる[二二]。

とはいえ、この学校における神道教育の実態については、これまで不明なところが大きかった。そこで本書では、その活動の一環として詠歌が含まれていたことを示唆する資料として、「本教館詠草」など有隣が編んだ歌集三点を翻刻掲載することにした。「龍種」こと副島種臣（一八二八～一九〇五）も含め、数々の佐賀の神職・国学者の名前がそこには見え、彼らの人間関係を示すものとしてだけでも、注目に値しよう。明治の国民教化政策と和歌との関係を考える材料にもなるだろう。

＊小車社の活動の様子

では小車社の会合の様子を、内柴の研究から紹介しよう[二三]。

往にし天保の末つ方に、南里有隣、古川松根等は、その他我歌道の同人等と相談して、宅廻りに、和歌の会を催してゐた。之を小車社と称したのであつた。

佐賀の旧家たる野中氏に、当時の記念品と見るべき、一組の割子弁当箱を蔵して居られる。それは、木地に、墨絵で、古代風の車輪をゑがいて、うすく春慶に漆を懸けてある。この弁当割子を納るゝ、表箱の蓋の表面に、

○まつ茶。
○菓子はあるに任す。
○飯は此割子を用ふ、菜、一種、香の物の外あるべからず。
○寒からん折り等、汁一つ加へんもあしからじ。
○酒は必ず欠くべからず。

と記し、同表面左下に「小車社」としてある。この書と彼の画と共に、松根の筆と云ふ事は、一目に瞭然として見られる所である。

＊野中元右衛門（一八一二～一八六七）[二三]

この野中氏とは、現在のウサイエン製薬につながる薬種商野中家を指す。当時の中心人物は、六代源兵衛の孫で、八代源兵衛（安貞）の従兄にあたる元右衛門である。叔父の七代源兵衛、父久右衛門が相次いで没し、八代源兵衛安貞が幼少で家業を取り仕切ることが叶わないなか、彼が野中家の経営を切り盛りし、酒造業にも携わった。

元右衛門は安政三年に設けられた藩の代品方の御用達の一

二二 拙稿「近代神道の形成」島薗進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『近代日本宗教史第一巻　維新の衝撃』（春秋社、二〇二〇）など。

二三 前掲内柴、一八〇頁。

二三 鶴田伸義「野中古水伝」『仏国行路記』（野中烏犀圓本店、一九三六）、野中源一郎「野中元右衛門」『佐賀医人伝』（佐賀新聞社、二〇一七）。

人となった。有田焼の生産・販売や長崎口からの薬種輸入、嬉野茶販売にも携わった。パリ万国博覧会の佐賀藩代表五人（他に佐野栄寿左衛門（一八二三～一九〇二）など）のうちの一人としてパリに渡り、客死した。

元右衛門の歌人としての号を古水と言い、小車社のメンバーとして佐賀歌壇に名を残している。先に見た通り野中家が小車社の会合に会場を提供したことは知られている。また、従兄の安貞も松根の歌集出版に協力したメンバーである。

＊『小車集』

ついで、刊行された社中撰集『小車集』（上下二巻、慶応三年、小車社蔵板）[二四]について見てみよう。まず掲げるのは、松根の著した序文である。

小車のまとゐ、月々にめくりてたゆることなければ、つみそふる歌の数、はたすくなからぬを、さなから取すてむかあたらしさに、そか中より聞えもすへきかきりをぬき出て一とちとはなしつるなり、かくて人々の心のくさひゆるふ事なくは、猶つき〳〵にものしてむと、しちのはしかきひとくたりことわりおくになむ

　　檜園のあるし松根

次に、巻末に掲げられた作者一覧を示す。有隣の死もあって、小車社の中心は古川松根に移っていた。彼を含めた藩主直正側近と、藩主直正自身が『小車集』に歌を寄せている。また大商人や神職、支藩小城藩の歌人も有力なメンバーだったようだ。

佐賀：本島方道、志波芳名、古川松根、今泉満春、山崎景臣、古川穂主、野口鶴年、永田一枝、下村通清、江口孝儀、中島芳洲、重松春香、野中古水、鶴丸信之、吉武維足、野口信親、緒方豊苗、原口千竹、野中安貞、新郷宗雄、緒方清石、鬼崎義隣、杉野竹弘、改善院元祐、佐多子（鍋島直正、幼名の貞丸をもじったか―直正の歌集と歌が重複する―）[二五]、柏子、遊布（妻）。小城：城島嘉保、城島嘉樹、徳見知愛、村崎宗粛、末永年恒

野中家には、藩の公用に関わって松根が連絡を取った書状が残されており、また野中家の経営台帳からは古川経由のものを含む藩関係の多額の預金（野中家にとっては債務）が確認できる[二六]。小車社は政治的経済的有力者の交際の一環としての性格があり、野中家はそのサロンとして機能していたのであろう。地域史的に見て無視できない事実である。

こうした彼らの和歌を通じた交際の実際、あるいは交際を通じた詠歌実践を具体的に捉えるための材料として、本書では彼らの歌合の記録を翻刻紹介している。

三、佐賀藩の外から見た小車社周辺

本書で翻刻紹介した諸書簡の背景説明も兼ねて、ここでは佐賀藩の外側の和歌の世界と古川松根および小車社の人々との関係を眺めてみたい。

二四 架蔵本に拠った。

二五 前掲内柴、一八二～一八三頁。

二六 伊藤昭弘「幕末維新期野中家の経営」同編『佐賀藩薬種商・野中家資料の総合研究―日本史・医科学史・国文学・思想史の観点から―』（佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一九）。

＊藩を越えた交際

周防出身の国学者近藤芳樹（一八〇一～一八八〇）は嘉永五年四月に佐賀を訪れ、野中邸で松根ほかの佐賀藩の文化人たちと交流している。同家は藩外の者も訪れることが出来るサロンだったようだ。

十九日。曇レリ。夜雨。野中元右エ門ガ亭ニ午時後ニマカル。今日コノ家ニツドヘル人々、枝吉平左エ門・南里伝之介・古川与市・今泉伝兵衛・山崎与五郎・原五郎左エ門。コレラノ人々ト夜ニ入マデモノカタラヒツ。今日モ酒肴トリ〻〵ニテ、イトタノシキ遊ビナリキ。コヨヒハ野中ノ別宅ニヤドル。

廿日。（中略）ソノ後、古川与市・枝吉平左エ門・今泉伝兵衛・同隼太来ル。マタ野口丈次郎信親トイフ町人モ来レリ。題ヲ探リテ歌ヲヨム。（中略）草場瑳介、サイツ頃ヨリ所労ノヨシニテ、屋敷ニ訪ントシツレドモコトワレリ。マタ藩制モアリテ、彼方ニ行コトハ禁ゼラレタルニ、今日菓子一箱ヲモチテ来ラレタリ。夜モスガラ雅談シテカヘラレヌ。矍鑠タル翁也。[二七]

熊本／長崎の中島広足（一七九二～一八六四）も嘉永七年に佐賀を訪れ、やはり野中家で松根らと交流している。その後も広足は松根や野中家宛の手紙を寄せている。『佐嘉日記』に松根の挿絵を欲しがったことや、阿波の国学者池辺真榛（藩主に軍事改革を建言するために調査に来た）を松根に紹介してほしいと頼んだことが、そこから窺える[二八]。また、万延元年、西洋式軍船の観光丸・電流丸が佐賀に戻る際、これを見た小倉の国学者西田直養（一七九三～一八六五）が松根のところを訪れ、これを詠んだ長歌を捧げている[二九]。

松根はまた文久年間の京都行に際して、公家の中院家や久世家に赴いて情報収集を実施した。その際の「上京日記」は歌日記として残されている。久世家との和歌を介した交際の一齣を次に掲げよう。

十九日、けふは久世の御殿にのぼらんとて其用意す、夕つかたみどのにのぼりたれば、やがてたいめし給ひ、何事もかたらはせ給ふついで、おのが歌よむ事を、かねてしり給ひけるにや、一ひらの紙に、御歌をかゝせ給ひて下し給ふ、

くもりなき言葉の玉の数々に名をこそながせ古川の水[三〇]

＊類題和歌集の幕末

ついで、当代歌壇の全国的動向に目を向けたい。当時は刊行類題和歌集全盛の時代であり、小車社中もその世界に参入していた。松根もその作品を載せた代表的な歌集に、『類題鴨川集』と『類題鰒玉集』の二つがある。まずそれらの基本的なところ

二七 久保田啓一・蔵本朋衣「山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（九）」『内海文化研究所紀要』四二（二〇一四）、三八頁。

二八 拙稿「中島広足『佐嘉日記』と野中古水」『西日本国語国文学』四（二〇一七）。

二九 「古川松根筆記」七『肥前史談』一七―二（国書刊行会、一九八五）。

三〇 前掲佐賀県立博物館編、一三六頁。

について確認しておこう。

長澤伴雄（一八〇八～一八五九）編『類題鴨川集』。嘉永元年に初編（太郎）が刊行され、以後安政元年の五郎まで、計五編が刊行された。附録として『詠史歌集』もある。京都を中心にした同時代歌人の作を多く掲載しつつ、全国から投稿を集め、作者の名前・地域と共に掲載した。その投稿募集文を次に掲げよう。

鴨川集は二編三編とつき／＼に、二冊づゝすり巻として世に出し玉はんの下かまへにおはすれば、それに加入したまはんとおもほす諸君子たち、御詠草に御俗名実名はさらなり、国所をも委く記しつけ玉ひて、かたく封して、先生家へさしつけておくり玉ひてよ、又飛脚便のもよりにて京にて末吉町上田亀齢館、大阪にて心斎橋秋田屋太右衛門、和歌山にて駿河町阪本屋喜一郎、右の方へおくり給ひても、とみに届け奉るべし

書林共敬白

三二『鴨川集』関係者は「さて又申迄には無御坐候へども、姓名録は巻尾に御つけ被成候が宜とやう申評に御坐候、其御心得奉祈候、それはかの中の歌人ども己が国処をいちはやく人にしられん為にと大に競ひ候事のよしに御坐候」と述べている。嘉永元年二月鈴木高鞆宛萩原広道書簡、関西大学図書館手紙を読む会「関西大学所蔵　萩原広道の消息（その二）」『関西大学図書館フォーラム』七（二〇〇二）第四。詳しくは亀井森「近世後期類題和歌集編纂の一齣」『近世文藝』九〇（二〇〇九）を参照のこと。

三三以上、別に掲げたもののほか、山本嘉将『近世和歌史論』（文教図書出版、一九五八）、同『加納諸平の研究』（初音書房、一九六一）、朝倉治彦監修、中澤伸弘・宮崎和廣編・解題『類題和歌　鰒玉・鴨川集』（クレス出版、二〇〇六）、亀井森「長澤伴雄の苦悩」『青山語文』三八（二〇〇八）、福田安典「近世後期類題集の諸問題」『学芸書としての中世類題集の研究』（国文学研究資料館、二〇一〇）など。

三四辻森秀英『近世後期歌壇の研究』（桜楓社、一九七八）九頁。

伴雄は紀州藩士で、京都で有職故実等の調査に携わった国学者である。もともとは仲の良かった加納諸平に毒を盛ったと言われ、諸平が病んでいる間に『鴨川集』の出版を開始する。しかし藩内政情の変化で入牢し、結局は自刃に追い込まれる。

これに先行するのが、加納諸平（一八〇六～一八五七）編『類題鰒玉集』になる。文政一一年に初編が刊行され、以下、中断をはさみ、安政元年に至るまで計七編が刊行された。『鴨川集』は『鰒玉集』を模倣したライバルにあたる。作者姓名録は当初は附属しておらず、別に刊行されている三三。諸平は国学にはまって身上を潰した遠州白須賀の夏目甕麿の息子で、紀州藩士の養子となって若山の本居派国学者サークルで名を挙げ、一派を成した。当初の『類題鰒玉集』は父の顕彰を狙いとしたが、投稿者から刊行費用を集めて続刊され、しかもよく売れる商品となった三三。先に述べた事情で『鰒玉集』六編、七編は刊行が遅れ、「お互に相手の作者は採らないという情勢にまでなった」三三という。

先に触れた近藤芳樹も類題和歌集を編み、あるいは詩話に倣った形式で歌人たちを論評する『寄居歌談』を続々と刊行し、評判になっていた。このように、京都中心の堂上和歌文化を横目に、出版を通じて各地の歌人がその存在を主張し、名を競うなかで地方歌壇が発達する、そんな状況が生じていたのである[三四]。

＊佐賀の歌人と類題和歌集[三五]

では佐賀の歌人とこれらの類題和歌集との関わりはいかなるものだったのだろうか。まず、『類題鴨川集』における佐賀歌人とその初出を掲げよう。

次郎集（嘉永三年）　宗穆　肥前荻　村崎卜也
次郎集（嘉永三年）　貞風　肥前佐賀藩　羽室平之允
三郎集(嘉永四年)　大鹿　肥前佐賀　宮城繍介（重松春香）
三郎集（嘉永四年）　宗粛　肥前小城　村﨑朴齋
三郎集（嘉永四年）　松根　肥前佐賀藩　古川與一
三郎集（嘉永四年）　實子　肥前小城家士　村﨑朴也姉
四郎集（嘉永四年）　満春　肥前藩　今泉傳兵衛
五郎集（嘉永七年）　元祐　肥前久保田　賢隆房
詠史歌集二編（未刊）　有隣　肥前佐賀　南里傳作
詠史歌集二編（未刊）　則文　肥前佐賀　今泉早太（蟹守）

このように、小車社関係者の和歌はそれなりに『類題鴨川集』に採択されている。なお村崎宗粛は桂園派の著名人、八田知紀と京都から戻る際の旅日記『雨衣日記』を残してもいる（鍋島家文庫、鍋 082/065）。

つぎに、長澤伴雄と交流のあった周防宮市の松崎天満宮の神職鈴木高鞆（一八一二～一八六〇）の「鴨川三郎集料歌」における松根評を掲げよう。

此人は佐賀にては上手の人のよし。かしこの宗匠とぞ、もと香川の社中にて、今広足に相談なるよし也。高鞆が評をも江戸往来にたづぬる人にて、本人（松根）より何とぞ鴨川集料に玉石集の余りをおくりてよと頼也。又、広足よりも其よしあつく頼おこせたり。いかで／＼加へ玉はんことを願もの也[三六]

佐賀歌壇の代表的人物で、もともとは桂園派だったが、幕末歌壇の有名人の一人、中島広足の「相談」と扱われている。そして高鞆自身が編者になった類題和歌集『類題玉石集』での非採用作について、松根が『鴨川集』での使い廻しを望んでいること、亀井森が既に指摘するところである。

松根が鈴木高鞆に送った書簡も残っている。試みに一通を次に示す。

（前欠）弐部、南里・重松への御書共、夫々相達候、其節之御返事ハ呈出置候、定而御落掌と奉存候、其已前之賜書、漸ク一両日前入手奉拝誦候、時下益御多祥御起居之条、奉怡喜候、玉石集并鶯蛙集御恵投被成下正ニ落手、驚候也、就中玉石御精撰之程、奉敬服候、近頃諸方ニて撰出有之趣、向々へも愚詠御送り被下候よし、御厚意忝被存候、草場へ之御新物萩焼一リンいけ共々早々遣し置候、近々出来之上容が含まれる。

三四 揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、一九九八）。
三五 この段、前掲拙稿「『当世百歌仙』の刊行とその周辺」の内
三六 前掲亀井。原資料は台湾大学長沢文庫〇五二一五。

差出可申候、又古萩之磁硯可給旨、尚更難有と而、古雅ナルベクと先おもひやり奉り候、能キ便り之節御送り被下様奉希候、重而御書給り候ハヾ、先日申上候城下本通りニてハ呉服町本陣野口丈次郎、又別筋へ通り候便りナラバ材木町野中元右衛門と申薬店へ、御届被下候ハヾ直様相達し申候、下ノ関諸岡作左衛門迄被差出候ても宜御座候、先ハ左之御礼御答候、例之草略乱毫御海涵奉希候、頓首

古川松根

十月廿六日

鈴木先生

侍史[三七]

高鞆が、自身編の『玉石集』や、『類題鶯蛙集』を松根に送っていること、また各地での類題和歌集出版計画に合わせて松根の詠草を転送していたことが窺える。野中家が活動の中で拠点的意味を持っていたことも確認できる。おそらく南里は有隣を指し、重松は小車社のメンバーで、高鞆の元に滞在して『玉石集』刊行を手伝った経験のある、重松春香であろう[三八]。

ここまで『鴨川集』と関係者について見てきたが、他方の『鰒玉集』についてはどうか。同シリーズの姓名録に松根は登場せず、肥前と言えば長崎、といった様子である。但し姓名録が刊行されなかった六編に二首、七編に二十六首、松根の作が載る[三九]。『鰒玉集』の刊行が停滞している時期に松根の名が『類題鴨川集』に載りはじめ、再開された『鰒玉集』にも入撰するようになった、といったところか。

古川松根関係資料のなかには、伴雄また諸平からの来簡が複数見出せる[四〇]。松根と付き合いのあった広足は両歌集に多く作品を掲載している。松根も影響力争いのなかで両派から求められたのか、それとも兎に角認められたいがために両方に投稿したのか、現時点では判断しかねるところではある。とはいえ、佐賀歌壇の中心人物として、松根が一目置かれていたことは確かであろう。多田清興『当世百歌仙』(安政二年三月自跋)は、国学系を中心にした当代歌人を載せた異種百人一首であり、収録された詠草は、長澤伴雄の協力で収集されたものだという。そこに松根は、佐賀から唯一選ばれているのである。

夢　古川松根

かけてだにおもはぬ
ことのみゆるかな
ゆめはこゝろの
ほかにやあるらん

おわりに

鍋島直正にとって古川松根は文字通り生死を共にした側近中の側近であり、たった一人で諸芸万般に通じた存在として、改革政治の遂行の中で、重要な役割を担った。直正主導の諸事

三七 山口県文書館所蔵諸家文書小川五郎収集資料　小川五郎 1293④-2-5。

三八 彼については差し当たり手紙を読む会「続々名家手簡(下)」『江戸時代文學誌』八(一九九一)、山崎勝昭『萩原広道』(ユニウス、二〇一六)を参照。

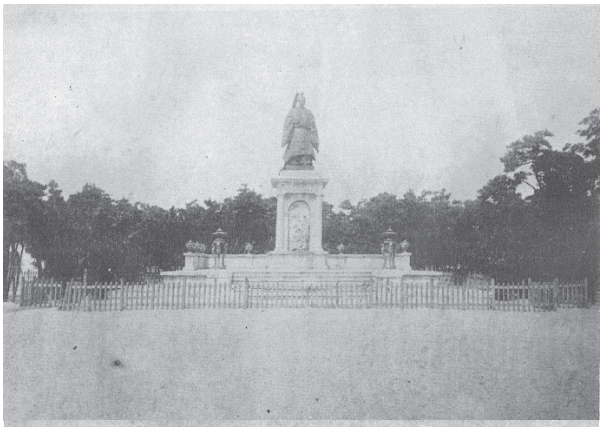
三九 中澤伸弘編『類題和歌鰒玉集人名総索引』(二〇一三)。

四〇 佐賀県立博物館所蔵資料 145 古川松根あて書状ほか資料。

業のデザイン担当として大きな役割を果たし、和歌を通じた社交能力も―政治の場も含め―大きな意味を持った。野中家を主な会場とした小車社の会合は、直正側近や藩内外の文化人が集うサロン・イベントとして機能したものと考えられる。そして、歌壇ジャーナリズムの隆盛と相俟った地方歌壇の全国的隆盛のなか、小車社の中心としての松根は佐賀歌壇の代表的人物として斯界に知られるようになった。歌人松根の姿についてあらためて整理すれば、こんなところになるだろうか。

先の明治維新一五〇周年と前後して、鍋島直正の事績にあらためて注目が集まり、戦時下に銅像が失われた直正をはじめ、幕末維新期佐賀藩の著名人の像が佐賀市内に数々建立された。しかしかつて直正像とともにあり、そしてともに金属供出の対象となった松根の像は、復元対象にならなかった[四一]。松根が陰になり日向になり直正と動きを共にしてきたという事実は、今や佐賀でもパブリック・メモリーの外側に置かれつつあるのだろう。だとすれば、あらためて彼の活動に光を当てることも無意味ではあるまい。そう考え、かく認める次第である。

図出典：久米邦武『鍋島直正公伝』五・六（中野礼四郎、一九二〇）口絵より、古川松根・鍋島直正銅像・古川松根銅像の写真。



四一 前掲佐賀県立博物館編、徳安和博・三ツ松誠・佐賀大学美術館編『佐賀藩十代藩主鍋島直正展』（佐賀大学美術館、二〇一九）。

［付記］本報告書の取りまとめを進めるなか、佐賀県立図書館や佐賀県立佐賀城本丸歴史館において、関係する講演会・勉強会の機会を与えられた。有益な御指摘・御助言をくださった参加者の皆さまに感謝申し上げたい。